

ポスター提示による献血情報は 大学生の献血意欲に関係するのか

Does Poster Display of Blood Donation Information Influence University Students' Willingness to Donate Blood?

佐々木 直美¹⁾ 升本 有紀¹⁾ 村田 夢佳¹⁾ 森 有澄佳¹⁾ 船越 久登²⁾

SASAKI Naomi · MASUMOTO Yuki · MURATA Yumeka · MORI Asuka · FUNAKOSHI Hisanori

山口県立大学看護栄養学部看護学科

Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

1) 山口県立大学看護栄養学部看護学科

Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

2) 山口県赤十字血液センター 献血推進課

Yamaguchi Red Cross Blood Center

要旨

本研究の目的は、ポスターを活用した献血情報提示が大学生の献血意欲に与える影響を検討することである。山口県内のA大学看護学生175名(19.42±1.13歳)を対象に、エレベーター内に献血情報と日本赤十字社が公表する血液在庫状況を掲示したポスターを2週間提示した。その後、アンケート調査を実施した。175名のうち、献血経験ありの者が29名(16.6%)、なしの者が146名(83.4%)で、献血講義受講経験ありの者が72名(41.1%)、なしの者が103名(58.9%)であった。いずれも経験なしの者が有意に多かった。調査期間中にエレベーターを利用した者は122名(全体の69.7%)で、そのうちポスター閲覧者は、64名(52.5%)であった。献血経験がある者でポスター閲覧をしている者、講義受講経験がある者でポスター閲覧をしている者が多かった。このことから献血経験や講義受講経験がある者は献血情報に興味を覚える可能性がある。また、13項目の献血情報に関して最尤法プロマックス回転による因子分析の結果、献血の意義や血液の使用用途といった「知識や制度の理解」、献血にかかる時間や流れといった「献血の流れと注意点」、献血ルームの場所や献血協力者への対応といった「献血サービス情報」の3因子が得られた。「今から6か月以内に献血に行こうという意欲」を目的変数とし、「学年」「献血経験」「講義受講経験」「知識や制度の理解」「献血の流れと注意点」「献血サービス情報」を説明変数とする重回帰分析の結果、献血意欲には「献血経験」「知識や制度の理解」「献血の流れと注意点」が有意に関連した(調整済み $R^2=0.34$)。一方、「学年」「講義経験」「献血サービス情報」は有意な関連を示さなかった。さらに、ポスターによる日々の献血状況の提示が献血への関心につながる理由について内容分析を行った。関心につながる理由には、不足血液型の可視化やリアルタイム情報による献血必要性の実感などがみられた。これらのことから、献血に関する知識の提供を早い時期から継続して実施しつつ、献血をする側であるだけでなく、誰もが提供を受ける側となり得る可能性があるという自分事として感じられるような情報提供が有効であることが示唆された。

Abstract

The purpose of this study was to examine the impact of using posters to provide blood donation information on university students' willingness to donate blood. The participants were 175 nursing students (mean age 19.42 ± 1.13 years) at University A in Yamaguchi Prefecture. Posters displaying blood donation information and the

ポスター提示による献血情報は大学生の献血意欲に関係するのか

blood inventory status published by the Japanese Red Cross Society were placed inside elevators for two weeks. Subsequently, a questionnaire survey was conducted. Of the 175 students, 29 (16.6%) had previous blood donation experience, and 146 (83.4%) had none; 72 (41.1%) had attended a lecture on blood donation, while 103 (58.9%) had not. Both experiences were significantly less common. During the survey period, 122 students (69.7%) used the elevator, and among them, 64 (52.5%) viewed the posters. Among those with blood donation experience and those with lecture attendance experience, a higher proportion had viewed the poster. This suggests that individuals with blood donation or lecture attendance experience may be more likely to pay attention to blood donation information. Factor analysis (maximum likelihood method with Promax rotation) of 13 blood donation information items identified three factors: “Understanding of Knowledge and Systems,” “Blood Donation Process and Precautions,” and “Blood Donation Service Information.” Multiple regression analysis, with “intention to donate blood within the next six months” as the dependent variable and “academic year,” “blood donation experience,” “lecture attendance,” and the three factors as independent variables, showed that blood donation intention was significantly associated with “blood donation experience,” “understanding of knowledge and systems,” and “blood donation process and precautions” (adjusted $R^2 = .34$), whereas “academic year,” “lecture attendance,” and “blood donation service information” were not significant. Furthermore, content analysis of reasons why poster displays increased interest revealed that visualization of blood type shortages and real-time information enhanced the perceived necessity of donation. These findings suggest that early and continuous education on blood donation, combined with information that helps individuals perceive donation as personally relevant, may be effective in promoting blood donation behavior.

キーワード

献血意欲, 大学生, ポスター掲示, リアルタイム情報, 献血啓発

Blood donation willingness, university students, poster display, real-time information, blood donation promotion

I. 研究の背景と目的

献血とは、「自発的な無償供血」のことであり、血液製剤を必要とする患者さんのために、供血者（血液を提供する者）が血液を自らの意思で提供し、かつそれに対して、金銭又は金銭の代替とみなされる物の支払を受けないことを指す（令和6年度血液事業報告）¹⁾。将来にわたり安定的に血液を確保するためには、若年層に対する献血推進活動が重要となる（令和6年度血液事業報告）¹⁾。若年層への献血啓発は、特にこの20年間、より一層強化されている²⁾。大学生はそうした機会や知識を提供される側となる一方で、提供する側にもなる。大学生が行っている取り組みとして、各都道府県には大学および短期大学・専門学校の学生で構成された学生献血推進ボランティア団体があり、若年層への献血普及啓発のためにイベント実施や献血呼びかけを行うなど大きな役割を担っている³⁾。こうした啓発活動は、献血経験者にとって、次に献血に行くための予約をとるきっかけとなり、献血未経験者にとって、献血に関心や行動を向けるきっかけとなる。大学生の献血未経験者が献血をしない理由として、未知のものへの不安や恐怖⁴⁾や、献血が出来る場所、自分が献血が出来る対象なのかが分からないということが理由として挙げられている⁵⁾。すなわち、献血啓発には、正しい知識の提供もさることながら、漠然とした不安を払拭し、具体的な献血にかかる時間や場所等の情報提供も必要と考える。こうした献血に関する情報を効果的に提供していく方法の継続的な検討のため、本研究では、ポスターを通して、日々の献血状況を提示することとした。この献血状況は、日本赤十字社全国47都道府県の血液センターが、各都道府県ページ上で「400mL献血」「200mL献血」「成分献血」の各分類で血液型別在庫を示し公開している⁶⁾。こうした情報は日々更新されるリアルタイムの献血情報を知るにおいて有益であるため、今回はその一部をポスターに反映させることによる影響を検討することとした。

II. 目的

本研究では、献血に関する知識の提供方法としてポスターを活用し、日々の献血状況を提示することが、大学生の

献血意欲に与える影響について検討を行う。

Ⅲ. 方法

1. 調査時期と調査対象者

調査時期：2025年4月～5月

調査対象者：山口県にあるA大学の看護学生

2. 調査方法

献血広報については「ポスター」や「看板・掲示板」は費用対効果も高く、高い広報効果がみられ、広報手段としての有効性が見いだされているため⁷⁾、本研究では、ポスターを用いた。

(1) 掲示したポスターの内容：ポスターは、2週間、掲示した。ポスターには献血情報（表1）と都道府県日々の必要な血液型を示した献血状況を提示した（図1）。図1は、日本赤十字社が毎日公表する献血状況⁶⁾を参考に前日と当日の情報を提示した。

(2) ポスターの掲示場所：ポスターはA大学内の看護学生が主として利用する特定の一基のエレベーターに掲示した。エレベーターを選んだ理由は、一定時間視認できる場所であるためである。

なお、天野ら(2019)は、電車の車内広告の視聴の目的は「ひまつぶし」がもっとも多く、「広告を見たり読んだりすることが楽しい」「商品・サービス・企業に関する情報を得る」「自分の近くにいる見知らぬ乗客と目線をあわせないようにする」であることを示している⁸⁾。

表1 献血に関する情報として使用した項目一覧

項目番号	献血に関する情報
1	【血液】は長期保存することも人工的に作ることもできないこと
2	【献血】とは病気の治療や手術などで輸血を必要としている患者さんの命を救うものであること
3	【献血】は健康な人が自らの血液を無償で提供するボランティアであること
4	【血液の使用用途】は、献血の約8割ががん治療や病気の治療に使われること
5	【献血できる年齢】は全血献血で400mlの場合は男性は17歳、女性は18歳から。成分献血は男女ともに18歳からであること
6	【献血できる体重】は全血献血で400mlの場合は男女ともに50kg以上であり、成分献血は男性は45kg、女性は40kg以上であること
7	【献血の流れ】は、受付⇒体重測定⇒問診/血圧・脈拍測定⇒ヘモグロビン濃度測定など⇒採血⇒休憩⇒献血終了であること
8	【献血にかかる時間】は、採血の時間は400mlでは10分～15分位、成分献血では体重等に応じて採血する量が異なるため40分から90分位、これに加え、問診や採血後の休憩などの時間があること
9	【献血できる基準に引っかかった場合の対応】として、体重や血圧や血液の濃さが献血ができる基準に足りなかったとしても、『食べる』『運動する』『眠る』などを通して健康な体作りをすることで献血できるようになることがあること
10	【献血後に具合が悪くなった時の対応】として、緊張感の強い場合やその日の体調によっては、採血に伴い気分が悪くなったりめまいがすることがあること。そのような場合はすぐに座るか、横になること。通常は頭を低くして30分程度安静にするだけで軽快すること。また採血後の腕の痛みなど何か心配なときは血液センターまで連絡できること
11	【献血協力者への対応】として、お菓子等がもらえることや血液結果がもらえるため健康管理に役立つこと
12	【やまぐち献血ルーム】は、山口赤十字病院すぐ横にあり、アプリで予約可能（希望時間の3時間前まで）であり、当日受付は、献血ルームのフリーダイヤルで問い合わせできること
13	【献血バス】がほぼ毎日、山口県内各市町を走っていること

ポスター提示による献血情報は大学生の献血意欲に関係するのか



図1 ポスター内に掲示した日々の献血状況の一例（一部改変）

注）日本赤十字社のラブラッド（Love Blood：日本赤十字社が提供する献血者向けの会員サービス）や血液センターの在庫表示では、血液型ごとの状況を上の3段階で示している。ハートマークは、以下の状態を指す。

非常に困っています：在庫がかなり不足している状態

安心です：在庫が十分にある状態

困っています：在庫が減ってきている状態

ポスター内では、掲示期間中、在庫の変化を可視化するため、昨日と今日の400mlの献血状況を提示した。

(3) アンケート内容：

アンケートの冒頭には、研究課題名、研究者の所属・氏名、研究目的の他、同意説明について記述した。

質問内容の構成は、以下の通りである。

①年齢（記述式）、②学年（選択式）、③ポスターを掲示しているエレベーターの使用の有無とポスターの閲覧の有無（いずれも選択式）、

④小・中・高校・大学等で献血に関する講義を受けたこと（以下、講義受講経験）の有無（選択式）、

⑤これまで献血したことがある経験（以下、献血経験）の有無と回数（有無は選択式、回数は記述式）、

⑥献血に関する情報を示した13項目（表1）に関して、献血しようという気持ちや行動がどの程度あるか。項目作成においては文献^{1) 9-11)}を参考にした上で、独自に作成し、研究者間で確認した。回答の仕方として、例えば「【血液】は長期保存することも人工的に作ることもできないこと」の項目について、-3、-2、-1、+1、+2、+3で回答を求めることとした。+の数字が多いほど「献血しよう」という気持ちや行動があり、-の数字が多いほど「献血したくない、あるいは献血できない」という気持ちや行動があるとして、あてはまる場所を選択する方式で回答を求めた。

⑦ポスターに記載した日々の献血状況（足りない血液や血液量）の情報は、献血に関する関心につながったか（「そうである」から「そうではない」の4件法および「該当するものを見ていない」から選択式）。

⑧上記⑦で「そうである」「まあそうである」「あまりそうではない」「そうではない」と考えた理由について自由記述。

⑨「今から6か月以内に献血に行こうという意欲があるか」という行動意欲（1～10段階のうち選択式。10に近いほど意欲があることを示す）。6か月以内としたのは、生活習慣を改善にむけた行動変容のステージのうちの関心期は「現在、実行していないが、6か月以内に実行しようと考えている」¹²⁾ことを参考にした。

なお、個人情報に配慮し、性別に関する情報は尋ねていない。

(4)調査依頼および回収方法

調査依頼は授業終了後に行った。回収方法は、依頼後1週間、回収ボックスを留置した。

3. 分析方法

(1)献血経験がある者となない者の割合、講義受講経験がある者となない者の割合を検討するため χ^2 検定を行った。

(2)ポスター閲覧の有無と献血経験との関連、ポスター閲覧の有無と講義受講経験との関連をFisherの正確確率検定により検討した。

(3)「献血に関する情報」13項目の因子構造を検討するため、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。

(4)献血意欲に関係する要因を検討するため重回帰分析を行った。

(5)日々の献血状況の情報は、献血に関する関心につながったかについて「そうである」「まあそうである」と回答した者、また「あまりそうではない」「そうではない」と回答した者がそのように考えた理由について、内容分析により検討した。

上記のうち(1)~(4)は、統計ソフトIBM SPSS ver.29を用いた。

4. インフォームドコンセントと倫理的配慮

アンケートの同意説明内容として、①研究課題名、②研究者の所属・氏名、③研究目的、④研究協力は任意であり、協力しなくても不利益は生じず、また協力しても直接の利益は生じないこと、⑤アンケートは無記名であり個人が特定されることはない旨、⑥アンケートに回答し送信を終了したことで研究協力に同意したものとみなす旨、⑦研究の結果は論文等で公表する旨、⑧アンケートデータは10年間保存し、その後適切な方法で廃棄する旨、⑨回答に要する時間は、10分程度である旨、⑩回答期限は、アンケート受け取り後、1週間以内であり、所定の回収ボックスにて回収を行う旨、⑪問い合わせ先を記載した。

本研究は、山口県立大学生命倫理委員会の承認を得て実施した【承認番号2024-43】。

IV. 結果

1. 対象者の属性、過去の学習経験および献血経験について

対象者は、175名で、年齢は、 19.42 ± 1.13 歳であった。対象者の基本属性を表2に示す。

献血経験についてはありの者が29名(16.6%)、献血経験なしの者が146名(83.4%)であった。献血経験なしの者が有意に多かった($\chi^2(1) = 78.2, p < .001$)。

講義受講経験については、ありの者が72名(41.1%)、なしの者が103名(58.9%)であった。講義受講経験なしの者が有意に多かった($\chi^2(1) = 5.49, p = .019$)。

2. ポスターの閲覧人数と献血経験、講義受講経験との関係について

期間中にエレベーターを使用したのは、「使用した」が122名(69.7%)、「使用していない」が53名(30.3%)であった。

「エレベーターを使用した」と回答した122名のうち、「ポスター全体を閲覧した」が53名(43.4%)、「ポスターを部分的に閲覧した(日々の献血状況は見えていない)」が11名、「ポスターを見ていない」が58名(47.6%)であった。

献血経験の有無とポスター閲覧の関連について、 2×2 分割表に対するFisherの正確確率検定を行った結果、献血経験の方が未経験者よりもポスターを閲覧している傾向が認められた($p = .049$)。割合は、経験ありで14/19(73.7%)、未経験で50/103(48.5%)であった。効果量としてのオッズ比は $OR = 2.97$ (95%信頼区間[1.00, 8.84])であった。

講義受講経験の有無とポスター閲覧の関連について、 2×2 分割表に対するFisherの正確確率検定を行った結果、受講経験の方が未受講者よりもポスターを閲覧していることが示された($p = .026$)。割合は、受講ありで32/49(65.3%)、未受講で32/73(43.8%)であった。効果量としてのオッズ比は $OR = 2.41$ (95%信頼区間[1.14, 5.10])

ポスター提示による献血情報は大学生の献血意欲に関係するの

であった。

表2 対象者の基本属性

項目	区分	人数	<i>M</i> ± <i>SD</i>	範囲
年齢	-	-	19.42±1.13	18～23
学年	1～2年	105 (60.0%)	-	-
	3～4年	70 (40.0%)	-	-
献血経験	あり	29 (16.6%)	-	-
	なし	146 (83.4%)	-	-
献血講義受講経験	あり	72 (41.1%)	-	-
	なし	103 (58.9%)	-	-
ポスター提示期間中のエレベーター利用	あり	122 (69.7%)	-	-
	なし	53 (30.3%)	-	-
ポスター閲覧 (エレベーター利用者n=122のうち)	ポスター全体を閲覧した	53 (43.4%)	-	-
	※53名のうち献血経験有	12	-	-
	※53名のうち献血経験無	41	-	-
	※53名のうち講義受講経験有	27	-	-
	※53名のうち講義受講経験無	26	-	-
	ポスターを部分的に閲覧した	11 (9%)	-	-
	※11名のうち献血経験有	2	-	-
	※11名のうち献血経験無	9	-	-
	※11名のうち講義受講経験有	5	-	-
	※11名のうち講義受講経験無	6	-	-
ポスターを閲覧していない	58 (47.6%)	-	-	
	※58名のうち献血経験有	5	-	-
	※58名のうち献血経験無	53	-	-
	※58名のうち講義受講経験有	17	-	-
ポスター閲覧による献血行動への関心 (ポスター全体を閲覧した53名と、ポスターを部分的に閲覧した11名を足したn=64のうち)	そうである	17 (9.7%)	-	-
	まあそうである	32 (18.3%)	-	-
	あまりそうではない	3 (1.7%)	-	-
	そうではない	1 (0.6%)	-	-
	ポスターは見たが日々の献血状況に関する毎日の更新は見えていない	11 (6.3%)	-	-
行動意欲	-	-	5.78±2.84	1～10

注) 行動意欲とは今後6か月以内に献血に行こうという意欲について1～10のうち10に近いほど意欲があることを示す。

3. 献血に関する情報の因子構造

献血に関する情報13項目について、因子構造を検討するため、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットから因子の固定数を3にして分析した。累積寄与率は64%であった (因子1=54.77%、因子2=9.63%、因子3=6.07%)。第1因子は、表1の項目番号7、項目番号8、項目番号9、項目番号10からなる因子であるため「献血の流れと注意点」と命名した。

第2因子は、項目番号1、項目番号2、項目番号3、項目番号4、項目番号5、項目番号6からなる因子であるため「知識や制度の理解」と命名した。

第3因子は、項目番号11、項目番号12、項目番号13からなるため「献血のサービスに関する情報」と命名した。結果を表3に示す。

表3 献血に関する情報の因子分析結果（最尤法・Promax回転, n=175）

項目番号	項目	因子1：献血の流れと注意点	因子2：知識や制度の理解	因子3：献血のサービスに関する情報	共通性 h^2
7	献血の流れ	0.8	0.15	-0.05	0.76
8	献血にかかる時間	0.95	-0.09	-0.01	0.78
9	献血できる基準に引っかかった場合の対応	0.76	0	0.07	0.67
10	献血後に具合が悪くなった時の対応	0.73	-0.1	0.16	0.63
1	血液の性質	-0.05	0.63	0.18	0.52
2	献血の意義	-0.12	0.88	-0.09	0.57
3	献血の定義(無償提供)	0.38	0.57	-0.11	0.63
4	血液の使用用途	-0.08	0.78	-0.01	0.52
5	献血できる年齢	0.18	0.6	0.18	0.76
6	献血出来る体重	0.23	0.52	0.02	0.5
11	献血協力者への対応	0.09	-0.08	0.73	0.55
12	やまぐち献血ルーム	0.18	-0.08	0.8	0.77
13	献血バス	-0.12	0.21	0.75	0.67

4. 献血意欲に関係する要因

「今から6か月以内に献血に行こうという気持ちがあるか（以下、行動意欲）」といった行動意欲に関係する要因を検討するため、目的変数の正規性をQQプロットで確認の上、「学年」「献血経験」「講義受講経験」「献血の流れと注意点の因子合計得点（以下、献血の流れと注意点）」「知識や制度の理解の因子合計得点（以下、知識や制度の理解）」「献血のサービスに関する情報の因子合計得点（以下、献血のサービスに関する情報）」と「行動意欲」についてピアソンの相関分析を行った。その結果、「献血経験」「献血の流れと注意点」「知識や制度の理解」「献血のサービスに関する情報」と「行動意欲」に有意な関連がみられた。「学年」と「講義受講経験」は有意な関連はみられなかった（表4）。そのため、「献血経験」「献血の流れと注意点」「知識や制度の理解」「献血のサービスに関する情報」を説明変数とし、「行動意欲」を目的変数とする強制投入法による重回帰分析を行った。重回帰分析の結果、モデルは有意であった ($F(4, 170) = 22.914, p < .001$, 調整済み $R^2 = .335$)。献血経験 ($\beta = .212, p < .001$)、献血の流れと注意点 ($\beta = .228, p = .017$)、および知識や制度の理解 ($\beta = .292, p = .001$) が行動意欲を有意に予測した。一方、献血のサービスに関する情報は有意ではなかった ($\beta = .078, p = .379$)。共線性は問題とならない水準であった（最大 VIF = 2.334）。結果を表5に示す。

表4 献血意欲と各説明変数のPearsonの相関分析結果 (n=175)

説明変数	r	p
学年	-0.02	0.791
献血経験の有無	0.25	<.001
講義受講経験の有無	0.07	0.33
献血の流れと注意点*	0.5	<.001
知識や制度の理解*	0.51	<.001
献血のサービスに関する情報*	0.43	<.001

注) *該当因子の合計得点

表5 重回帰分析の結果（目的変数：行動意欲）

変数	<i>B</i>	<i>SE</i>	β	<i>t</i>	<i>p</i>	95% <i>CI</i> (<i>B</i>)	<i>VF</i>
献血経験	1.62	0.47	0.21	3.42	< .001	[0.68, 2.55]	1.01
献血の流れと注意点*	0.11	0.05	0.23	2.42	0.017	[0.02, 0.20]	2.33
知識や制度の理解*	0.16	0.05	0.29	3.25	0.001	[0.06, 0.26]	2.12
献血のサービスに関する情報*	0.08	0.09	0.08	0.88	0.379	[-0.10, 0.25]	2.04

注) モデルの要約: $R = .59$, $R^2 = .35$, 調整済み $R^2 = .34$, $F(4, 170) = 22.91$, $p < .001$, Durbin-Watson = 1.82

$p < .05$ を有意とした。従属変数: 意欲。説明変数は上記の変数とした。

B: 非標準化回帰係数; *SE*: 標準誤差; β : 標準化回帰係数

*該当因子の合計得点

5. ポスターの閲覧を通して日々の献血状況を知ることが献血に関する関心につながるか

ポスターは、日々の献血状況を毎日更新、掲載していたが、情報が献血に関する関心につながったかについて以下に示す。ポスターを閲覧した者は64名のうち「そうではない」が1名、「あまりそうではない」が3名、「まあそうである」が32名、「そうである」が17名、「ポスターは見たが日々の献血状況に関する毎日の更新は見えていない」が11名であった。

「そうである」「まあそうである」と回答とした者がそのように回答した理由に関心につながる理由として表6に、「あまりそうではない」「そうではない」と回答した者がそのように回答した理由に関心につながらない理由として表7に示す。

カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]、コードを、<>で示す。

(1) 関心につながる理由

関心につながる理由として、7つのカテゴリーが得られた。

①【どの血液型がどのくらい足りないという具体の可視化】

このカテゴリーは、<何型の血液が足りていないかが一目見て分かるから>というコードを含むサブカテゴリー[どの血液型が足りていないかが分かりやすい]、<具体的にどれくらい足りないか、一目見て知ることができたから>というコードを含むサブカテゴリー[具体的にどれくらい足りていないかが分かりやすい]から成り立つ。

②【自分が、困っている人の力になれる】

このカテゴリーは、<困っている人がいることがすぐにわかったから>というコードを含むサブカテゴリー[困っている人がいることが分かった]、<献血を必要としている人がいて、自分でも力になれるならなりたいたいと思ったから>というコードを含むサブカテゴリー[自分でも力になれるならと思った]から成り立つ。

③【自分と同じ血液型が足りないという情報は当事者意識の自覚につながる】

このカテゴリーは、<自分と同じ血液型が足りていないと分かって時間があれば行こうと思ったから>というコードを含むサブカテゴリー[不足している血液型が自分と同じ]、<自分や身内、友達など病気になって輸血するときに足りなかったら困るから>というコードを含むサブカテゴリー[自分や家族が輸血してもらう時に困る]から成り立つ。

④【リアルタイムの情報が、血液の足りなさの実感につながる】

このカテゴリーは、<血液の足りなさを目で見て実感したから>、<リアルタイムで知れて興味が湧いたから>、<日々の献血状況が分かることで、今、必要とされているのか、今は必要がないのかが分かったから>というコードを含むサブカテゴリー[現在の状況をリアルタイムで知ること、血液の足りなさを実感する]から成り立つ。

⑤【献血経験や関心の土台がすでにある】

このカテゴリーは、<普段から献血していたから>というコードを含むサブカテゴリー[普段から、献血経験がある]、<もともと献血をしてみたいと思っていて、状況が可視化され、献血してみたいという思いが強くなったから>、<献血はしたいと思っていたが、決め手がなかったから>というコードを含むサブカテゴリー[もともと献血に関

心あり、状況を知ることで献血意欲が高まった]から成り立つ。

⑥【献血のことを知る機会となる】

このカテゴリーは、＜献血について詳しく知れたから＞、＜知らなかった献血のことを知れたから＞、＜献血の必要性が分かったから＞というコードを含むサブカテゴリー[献血のことが分かった]から成り立つ。

⑦【足りない血液型に対する思い込みがあり、実際はそうとも限らないことが分かる】

このカテゴリーは、＜A型に人は多いから、A型は足りてるんだろうな、AB型は希少だから足りてないんだろうなと思っていた＞というコードを含むサブカテゴリー[足りない血液型に対する思い込みがある]、＜日に応じて足りない血液型は異なることが分かったため、興味がわいた＞というコードを含むサブカテゴリー[日によって足りない血液型が異なるということが分かる]から成り立つ。

(2) 関心につながらない理由

次に、日々の献血状況の更新が献血に関する関心に「つながらなかった」理由を以下に挙げる。

「採血をすると、迷走神経反射で気を失うことが多々あるため、怖くて献血には抵抗がある」

「献血に行ったことがことがないため、他人事として捉えてしまい、見ても興味が湧かない」

「献血は怖いイメージが強い」であった。

表6 日々の献血状況の閲覧が献血への関心につながった理由

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
どの血液型がどのくらい足りないという具体的可視化	どの血液型が足りないかが分かりやすい	何型の血液が足りてないかが一目見て、分かるから (10)
	具体的にどれくらい足りないかが分かりやすい	具体的にどれくらい足りないか、一目見て知ることができたから (3)
自分が、困っている人の力になれる	困っている人がいることが分かった	困っている人がいることがすぐに分かったから (4)
	自分でも力になれるならと思った	献血を必要としている人がいて、自分でも力になれるならなりたいと思ったから (6)
自分と同じ血液型が足りないという情報は当事者意識の自覚につながる	不足している血液型が自分と同じ	自分と同じ血液型が足りていないと分かって時間があれば行こうと思ったから(9)
	自分や家族が輸血してもらう時に困る	自分や身内、友達など病気になるって輸血するときに足りなかったら困るから (1)
リアルタイムの情報が、血液の足りなさの実感につながる	現在の状況をリアルタイム知ること、血液の足りなさを実感する	血液の足りなさを目で見て実感したから (4) リアルタイムの献血状況が分かることで、今、必要とされているのか、今は必要がないのかが分かったから (1)
献血経験や関心の土台がすでにある	普段から、献血経験がある	普段から献血していたから (1)
	もともと献血に関心あり、状況を知ることで献血意欲が高まった	もともと献血をしてみたいと思っていて、状況が可視化され、献血してみたいという思いが強くなったから (2) 献血はしたいと思っていたが、決め手がなかったから (1)
献血のことを知る機会となる	献血のことが分かった	献血について詳しく知れたから (1) 知らなかった献血のことを知れたから (1) 献血の必要性が分かったから (1)
足りない血液型に対する思い込みがあり、実際はそうとも限らないことが分かる	足りない血液型に対する思い込みがある	A型に人は多いから、A型は足りてるんだろうな、AB型は希少だから足りてないんだろうなと思っていた (1)
	日によって足りない血液型が異なるということが分かる	日に応じて足りない血液型は異なることが分かったため、興味がわいた (1)

注) 上記は「ポスターに記載した日々の献血状況の情報は、献血に関する関心につながったか」という問いについて「そうである」「まあそうである」と回答した者の自由記述をまとめた。
コードの末尾の()は出現したコードの数を示す。

表7 日々の献血状況の閲覧が献血への関心につながらなかった理由

採血をすると、迷走神経反射で気を失うことが多々あるため、怖くて献血には抵抗がある (1)
献血に行ったことがことがないため、他人事として捉えてしまい、見ても興味が湧かない (1)
献血は怖いイメージが強い (1)

注) 上記は「ポスターに記載した日々の献血状況の情報は、献血に関する関心につながったか」という問いについて「そうではない」「あまりそうではない」と回答した者の自由記述をまとめた。

コードの末尾の()は出現したコードの数を示す。

V. 考察

1. ポスターの閲覧人数と献血経験、講義受講経験との関係について

献血経験については献血経験なしの者が有意に多く、講義受講経験については学習経験なしの者があるの者より多かった。また、調査期間中に、エレベーター利用者のうちポスターを閲覧した者は献血経験、講義受講経験が多かった。ポスターは、献血に関する情報や案内を含むものであり、多くの人に見てもらうことが重要であるが、何等か献血に関わったことがないと、そうした情報が目に入りやすく、内容に意識を向けにくい可能性がある。高校生で、献血に関する授業の受講歴がある者では、献血行動を行っている者の方が行っていない者よりも有意に多いことが報告されている¹³⁾。よって、早期からの献血啓発や、学習機会の提供の継続的な取り組みが必要と考える。

2. 献血意欲に関係する要因

重回帰分析の結果、「献血経験」「知識や制度の理解」「献血の流れと注意点」と「行動意欲」に有意な関連がみられた。標準化回帰係数は、「知識や制度の理解」「献血の流れと注意点」「献血経験」の順で行動意欲と関係している。献血の意義や血液の使用用途といった「知識や制度の理解」の行動意欲との関係には、小学校や中学校での学校教育での「道徳」の学びが土台となっていると考える。小、中学校の学習指導要領によれば「道徳」の学習内容は、小学校が「親切や思いやり」、「公共の精神」など¹⁴⁾、中学校が「思いやり、感謝」、「社会参画、公共の精神」などである¹⁵⁾。すなわち小学生の頃から思いやりや公共の精神といった学びが身につけており、献血を通して誰かの力になりたいという行動意欲につながったのではなかろうか。内閣府による社会意識に関する世論調査では、国民の社会貢献意識や公共心に関する調査を行っており、「社会のために役立ちたい」と答えた割合が6割以上で、特に「環境保護」「福祉活動」「災害支援」などへの関心が高いことが示されている¹⁶⁾。厚生労働省が作製した献血啓発のためのポスターには、「献血って実は身近な社会貢献」という文字がある¹⁷⁾。このように、献血広報においては、献血が社会貢献の一つであるという認識を伝えていくことが重要と考える。

次に、献血に要する時間に関することや、具合が悪くなった時の対応といった「献血の流れと注意点」についてである。献血に要する時間については、長い短いといった感覚は個人差があるが、授業だけでなく、アルバイトやサークル活動などで多忙な中で、ある程度まとまった時間を捻出するためには自身の他のスケジュールとの調整もある。佐々木ら(2025)の研究においても、献血に行こうと思う時は、「暇な時間がある」「長期休み」といった時間が確保できた時や、「献血バスが来ている時」など都合が良い時などが挙がっていた⁵⁾。こうした時間の確保の難しさは献血意欲に関係すると考える。また、具合が悪くなった時の対応のように安全性に関する情報は事前に的確に伝えることは、知らないことによる不安の予防につながるとともに、何か起きた時の対応体制があることを伝えることであり、協力者への倫理的配慮であると考えられる。しかし、こうした情報は、積極的な献血意欲にはつながりにくいため、こうしたサポートシステムの提供について丁寧に、分かりやすく伝えていくことが重要といえよう。

「献血経験」については、献血の経験があると、次の献血につながりやすいと考える。献血経験者の継続につながるため。献血ルームや献血会場の環境整備、ラブラッドアプリ(Love Blood:日本赤十字社が提供する献血者向けの会員サービス)等の利便性を高める取り組みが行われている¹⁸⁾。こうした取り組みは継続していく必要がある。

一方、「学年」と「献血のサービスに関する情報」は重回帰分析では、献血行動と関係していなかった。このことから献血意欲には学年というよりは、中学校や高校の献血啓発ポスターの掲示など厚生労働省の献血推進の施策^{19,20)}の浸透によって、将来的に、若年時からこうした情報に触れたか触れていないかによる違いが出てくる可能性があるかもしれない。また、献血サービスの情報は、今回の結果からは関係がなかったことから、記念品などのサービスの充実については、その必要性や内容について検討を継続していく必要がある。

3. ポスターの閲覧を通して日々の献血状況を知ることが献血に関する関心につながるか

関心につながった理由のカテゴリーは、【どの血液型がどのくらい足りないという具体の可視化】【自分が、困っている人の力になれる】【自分と同じ血液型が足りないという情報は当事者意識の自覚につながる】【リアルタイムの情報が、血液の足りなさの実感につながる】【献血経験や関心の土台がすでにある】【献血のを知る機会となる】【足りない血液型に対する思い込みがあり、実際はそうとも限らないことが分かる】の7項目が挙がっ

ていた。ラブラッドに登録していない場合には、日々の献血状況は日本赤十字社各都道府県の血液センターのホームページ⁶⁾を閲覧しないと情報は出てこない。しかし、ホームページを閲覧する人は、献血に関心がある、あるいは献血をしたことがある人が該当しやすいと考える。よって、足りない血液型は一定ではないことや、自身と同じ血液型が足りないということが身近に分かり、自分事として感じられる広報を行っていくことが必要と考える。

一方で関心につながらなかった理由のカテゴリーは、「採血をすると、迷走神経反射で気を失うことが多々あるため、怖くて献血には抵抗がある」「献血に行ったことがないため、他人事として捉えてしまい、見ても興味が湧かない」「献血は怖いイメージが強い」であり、献血への怖さや他人事という認識が挙がっていた。こうした怖さを和らげるための一つとして、誘ってくれる友人の存在があると考え。佐々木らの研究において、「献血に行ったきっかけ」は、「お菓子や粗品がもらえるから」「友人に誘われたから」「興味があったから」などが上位に挙がっている⁵⁾。このように、友人が一緒だと、献血後の体調についても互いに気にしあうことも出来るため安心につながる。こうした近しい友人による誘い合いでなくても、学生献血推進ボランティアの団体による若年層への献血普及啓発イベント³⁾も、誘い合いの一環と考えられる。イメージや思い込みではなく、献血の正しい知識を知った上で、「献血する」「今は、しない」といった選択が出来るよう支援していくことが望ましいと考える。

VI. 今後の課題とまとめ

今後は、調査地域を広げ、複数の学科の対象者に実施することで新たな知見が得られる可能性がある。またポスターの掲示場所として、エレベーターを挙げたが、利用階までの所要時間が短いこと、複数名でエレベーターに乗り込むことから、ポスターを見て、内容を読むほどの時間がなかった可能性がある。そうした限界をふまえ、ポスターの掲示場所を検討する必要がある。一方で、献血経験や講義受講経験がある者の方がいない者に比べてポスターを閲覧しやすい可能性があることから、早期のうちに献血について正しい知識を提供しておくことが重要と考える。まずは献血を知って知識の素地を作ること、そしてリアルタイムの献血情報の提供、かつ友人同士で誘い合うといった取り組みが献血行動へとつながる可能性が示唆された。

本研究の実施にあたり利益相反はありません。

謝辞：本研究の調査に協力して下さった皆さんに御礼を申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省医薬局血液対策課 令和6年度 血液事業報告
<https://www.mhlw.go.jp/content/11120000/001482191.pdf> (2025年12月31日検索)
- 2) 厚生労働量 献血推進に係る新たな中期目標「献血推進2025」
<https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/000798547.pdf> (2025年12月31日検索)
- 3) 中国四国学生献血推進協議会 日本赤十字社中国四国ブロック血液センター
https://www.bs.jrc.or.jp/csk/bbc/special/m6_03_index.html (2025年12月31日検索)
- 4) 眞壁 美香・大川 聡子・安本 理抄・根来 佐由美・上野 昌江 (2019). 大学生の献血意識を踏まえた啓発方法の検討 日本地域看護学会誌. 22 (1), 43-50.
- 5) 佐々木直美・安野里菜・酒井琴茜・十河 陸・桑名啓介・船越久登 (2025). 献血に関する知識は献血意欲や行動に関係するのか 山口県立大学学術情報. 18, 207-217.
- 6) 在庫状況 日本赤十字社 <https://www.jrc.or.jp/mr/message/plan/stock/> (2025年12月31日検索)
- 7) 吉田文洋・福田成秀・大衛 健・藤木孝一・松田敦志・中村博明・石川博徳・竹野良三・佐川公矯 (2016). 初回献血者へのアンケート調査による献血推進のための広報活動の有効性の評価 血液事業. 39 (1), 43-47.
- 8) 天野美穂子・橋元良明(2019). 電車内における情報行動と社内広告の効果 電気通信普及財団研究調査女性報告書. 34, 1-12.
- 9) 日本赤十字社ホームページ <https://www.jrc.or.jp/donation/> (2025年12月31日検索)

ポスター提示による献血情報は大学生の献血意欲に関係するののか

- 10) 山口赤十字血液センターホームページ
<https://www.bs.jrc.or.jp/csk/yamaguchi/index.html> (2025年12月31日検索)
- 11) 献血にご協力いただけなかった方々へ なるほど! 献血 日本赤十字社 令和4年4月第41版
- 12) Prochaska, J. O., and DiClemente C. C. (1983). Stage and processes of self-change of smoking: toward an integrative model of change. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 51, 390-395.
- 13) 榛葉隆人・山田千亜希・藤原晴美・芝田大樹・石塚恵子・古牧宏啓・渡邊弘子・梶原道子・浅井隆善・岩尾憲明・室井一男・竹下明裕 (2019) . 高校生の献血に向けて効果的な献血推進活動とは: 高校生を対象とした献血に関する意識調査 (第3報) *日本輸血細胞治療学会誌*. 65 (5), 839-843.
- 14) 文部科学省 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_01.pdf
(2025年12月31日検索)
- 15) 文部科学省 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)
https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_02.pdf
(2025年12月31日検索)
- 16) 内閣府 社会意識に関する世論調査 (令和6年10月)
<https://survey.gov-online.go.jp/202501/r06/r06-shakai/gairyaku.pdf>
(2025年12月31日検索)
- 17) 厚生労働省 献血事業の情報
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_50194.html
(2025年12月31日検索)
- 18) 厚生労働省 令和6年度の献血実績と今後の方向性について 令和7年度第1回献血推進調査会
<https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/001515252.pdf> (2025年12月31日検索)
- 19) 厚生労働省 献血推進2020
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11120000-Iyakushokuhinkyoku/2-2.pdf> (2025年12月31日検索)
- 20) 厚生労働省 献血推進の施策について (厚生労働省の取組) 令和5年度第1回献血推進調査会
<https://www.mhlw.go.jp/content/11127000/001130023.pdf> (2025年12月31日検索)